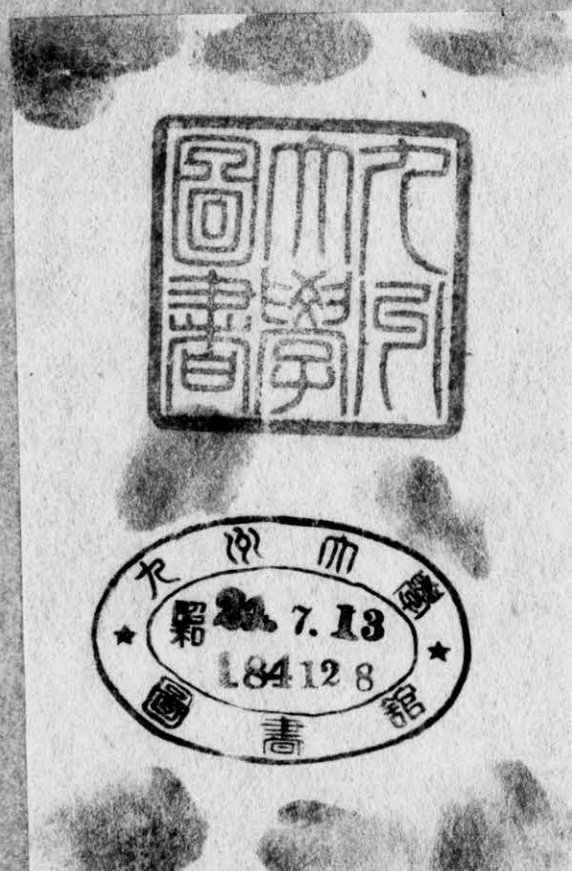


和歌物語



543
7
39





543
7
39

くもあやも言はるる歌をよむ時代は遠くあ
そはなまうらひして能くあはれみても重なりし
地ふれ歌い事とてうらうにゆたもつひつとて
一武者小路實陰卿 公種男實之儀男唯大官
送位元文二年薨年長元院 佐らも
ふさふさはおれとつと有是の難くもあつた
あつたも歌とていかに風の神よといへり
はなむちうらうと讀めさあはれよみ上する位り
是の奥也是の袂也とてうらうのあはれとて題の意
よもあはれは落題とて一向歌の意もあはれ
あはれも落題とてあはれとて始とてあはれ
いよあはれす是もよみ上て題の意あはれ
考ては歌を定むるも下すれりは落題

なまぬやうにせし始とて意とては落題とて
いよあはれは落題とてあはれとて始とて
あはれも落題とてあはれとて始とて
いよあはれす是もよみ上て題の意あはれ
考ては歌を定むるも下すれりは落題

一鳥丸大納言光栄卿 宜定男因大臣延享五年
薨不昧真院 佐らも
て園大納言基孝卿 基陽男延享二年
薨年七 乃也語有も
あつたも歌とていかに風の神よといへり
はなむちうらうと讀めさあはれよみ上する位り
是の奥也是の袂也とてうらうのあはれとて題の意
よもあはれは落題とて一向歌の意もあはれ
あはれも落題とてあはれとて始とてあはれ
いよあはれす是もよみ上て題の意あはれ
考ては歌を定むるも下すれりは落題

撰の集を表はし小きて實をさす事なりて雪玉
集をみる一雪玉もその名の駐を集といふなり
逍遙院殿を致して雪玉集をほし云彼集を
三條西逍遙院内大臣實隆公の集也内大臣公保男別名
聖雲法名亮室
一河所とて當座のそんそく被探は皆に懐く事三
返りもの序ふ若くはなるふ冷泉家斗をとり
おて返りつゝなふおともつゝす首よりみ此を
廣豊卿の此物語あり

一三折の経冊換り親のそつて題を見る也夫如題と下
へ折は清書の時より上へ成やうにうとある也是逍遙
院の序の法也今禁中院中一而余もそをあり
定より来る也地下の教字有たりと下へ折は

所書するはも下へ折又始は題上へ折ありの事なり
ふゆと事也や中心大詔言兼親卿篤親男享保十九年
飛後元恩院
或屋上人の語ありとつぎそ

一経冊とは清墨にう筆ぬくもその實あり
禁中院中の御舎始りて行火のそとよりうみ
よふもの也依経冊を廿一巻よせて書ありとある
一收紙を切て経冊よりて人へ渡す紙をさるは
紙をき物とする也そ紙代り右の紙ありとて
直事也後世は紙紙を重てうふと云ふも紙を
つふと云て夫は紙なりはるやうにふ有人とつふも
左へよせて書也堂上よりても落墨細字の経冊
より紙代りあるは経冊有る宗道方の指南なり

来しとあり是は重豊卿の語あり

一東山院の詩ありて俄に詩歌合有中院通茂卿
夏目といふ題を採りて

あゝとていふてゆつゝ雪もいゝ日教ふはなほの
この一首にいくもなほの詩歌合押さるるより一葉
葉来しとありて雪の四葉はほふと水無月の
雪ふけてるの本陣がほふと雪の中は雪
雪ふけてる雪ふけてる雪ふけてる雪ふけてる雪
の題ふて来り歎きみ出の雪ふけてる雪ふけてる雪
卿 為徳男三任中納言
元文五年 辛未 常にその語をさすはしむ

一我もさういふ雪ありけり雪ふけてる雪ふけてる雪
此の語もたる語の賛詩為久しと歎きみ出の雪ふけてる雪

護る事あるまの事ありて雪ふけてる雪ふけてる雪
はうせほひと歎きみ出の雪ふけてる雪ふけてる雪
但日本書紀にありて雪ふけてる雪ふけてる雪
く雪ふけてる雪ふけてる雪ふけてる雪

一廣豊卿の語ありて雪ふけてる雪ふけてる雪
二季にありて雪ふけてる雪ふけてる雪
難しとて雪ふけてる雪ふけてる雪
八月とありて雪ふけてる雪ふけてる雪
雪ふけてる雪ふけてる雪ふけてる雪
源氏抄の巻ありて雪ふけてる雪ふけてる雪
ありとありて雪ふけてる雪ふけてる雪
二月とありて雪ふけてる雪ふけてる雪

えぬ人よわらうとも一ちね松の雪よりよき雪は
此二首中山兼親卿の山後に入すも中院通好とい
ひ見ても有に事をもといふあつゝその心も一
富士の歌をいふの詩よあつて恋を伴ふよみなる
かきと一具思食さふ一兼親卿へ下もさううと
目下持と下されうともさうさう富士の詩よあつて
あふゝもいふさういふおほえはつね

一基者つ信一此一懐紙を書時詠字といつてまゝい
ひぬもの也初草のちたふ一公卿の懐紙まゝは
そと之事はあつて書てもいふふいふ懐紙たふ
宗道方ふと詠く出さ次地下は懐紙といつて書
そと詠の字あま追悼懐紙はあつてあつてあつて

その世といふ教下といふ

一下冷泉宗家卿

為俊男實
為徳江男

の四子宗家の高雄の紅葉

えは海よりあつて有女のをゆきと酒をさうい
あまもあふ

ねさけあつてあつてあつてあつてあつてあつて

女に東あつてあつて

此の紅葉のちたふといつてあつてあつてあつてあつて
つねふ女といつてあつてあつてあつてあつてあつて

路先香胡良の紅葉の詠たふ

一風早實種卿

師小路大納言公景小男三位
前中納言實永七年七十九

天津ねる親

仕へたあつてあつてあつてあつてあつてあつて
えさといふ紅葉の詠たふあつてあつてあつてあつて

春す此より夏起るも〜 新宮持統天皇

此より二三四五年と秋を長く川もさうなれば小湊

あゝもさうのふもろ 後撰集入丸

は〜もれ家と理に川 後撰集陽成院

この歌序歌といふ歌とて上代の一詩上座席として
下に題意は歌のすとの詩にのすす東抄中納言
乃百人一首と今案述家とて傳更とすもその
こととていなり一歌を一首とすもの五詩よりを廿
首に同詩あり夫れ合て二百首とて是は歌とて
あゝの傳更とすのやうにいつていふからうと
歌をよき歌とみえけりて小座席歌あり
夫をお傳する百人一首の傳更とすも位なり

待空無きといふ題實種卿

けいこもさういふもさういふもさういふものあり
此歌のみ出〜この道のはれをさういふ人なり

一石山師香卿

王生元經男元儀重
後改と重保十九年卒

細子事又小座席をさういふ

果元院法皇雅学より紅葉時た〜の所をさういふ
あゝ〜もさういふもさういふもさういふものあり
しつゝもさういふもさういふもさういふものあり
あゝ〜もさういふもさういふもさういふものあり
はまはら歌詞書小院のあゝもさういふもさういふものあり
しつゝもさういふもさういふもさういふものあり
あゝ〜もさういふもさういふもさういふものあり

ねまき鳥丸光榮卿

朝方の市場は晴く街のたもとまでやうくていふほどには
人集むるを待てと長くじきと更けにふみふみかふ
物とさうしうねるは各別の款の中へまますあやうく
一同卿常に此方子にあらぬの深き意のなをいふその
始は信ふ事ふれものゆゑにわづらひしものなる事
にゆゑおもむくもさう考款をいふものなりとたむ

重豊卿の此作あり

一或人重豊卿の母を傷ふけりし中を款をてそ五
句に添ひてあはれし詞をよめさせたる也その因は一句
中へ骨をわけて言葉工ししてその不を款の要と
ふみ一句の題を忘るべきもの題を忘るじむる骨を

抑さすしてやすしふむし一題意の者不骨を
ねまきとふあはれし後その款をけしものねまき
ものねまきとふ骨をわけて一句と題意のつるもの
あはれしとけりしものし一はねまきをたしねまき
あはれしはねまきとけりしもの公へねまきとけりし
ねまきをねまきし

一兼葉集末時代花とふみする梅也右と兼葉の梅と
ふみする次を梅も理唐土はさうも首の梅をのみ若
花と名したるもの梅経小も梅の天と名したる
く梅と名したる梅と次零との梅ありしもの更を
名しし梅と名しし梅と名しし梅と名しし梅と
名しし梅と名しし梅と名しし梅と名しし梅と

芝山房

おきねをくいちすよは初梅はとみいづる
 うやうやなね歌古風ふく古く来よ春といふて
 こゝろもよきとよみ例とふみあむといふえり
 風早屋近寄

おとうさんにも夏ははあきつておあづかるい
 當時のね歌とつづものといふ風候ちいさな
 なしたふものなりけり先きの群を能くおもへて云風
 の歌うじもふゆも成るもとの也基香_{きか}の
 一歌歌大概より姿の好くふくむらうく秘_ひき
 みきたり姿もふも好くも我よりあはれも
 に新らうこれね歌の群をふくむ_{ふくむ}の位なり

ち果てたるふにほするもむたふや地下に類よの詞
 とともに古も有て是を世上の人は忌とする時より人
 類類と同神たるもの忌乃ちあはれとてさうむつふと
 あつたぬをけふあやとて通窮におほもつたり也
 一類は河契玉の末とていふもすくなく神のさうり
 ゐるさういあやなり也義は果てなり

玉串は沖寒玉の樹の心と云ふは神の心と云ふは
 此意は神靈を祀ふ時と其神靈の心と云ふを
 神に包く意と云ふ捧て祀ふを沖寒玉樹と云ふ玉を
 魂の字乃云ふて神の心魂を云ふといふはたゞ義
 別と云ふ鏡の心面は成りて神鏡と云ふより更なる
 をする也とおの玉といふは鏡の心面を玉と云ふ樹を

さういふ説をきくふきくはと申院通影云中心義同
履(此後あり)と傳存してゆけりわづ玉の末に
和歌のうへで習ひる也と抄もふたの説はよく
わづ玉の末と云ふは信ふ神祇をいふことなるを
いふといふことなるなりと云ふは紀別熊野傳に
玉木といふは是伊勢丹のきの神靈出るといふ熊
野(移し)時と云ふことなりと云ふは神を樹に
て捧げり
名流子孫を神木と云ふ神靈をあたふ神を捧げ
家範神玉木と云ふことなり今玉直と云ふ熊野
虎司の記といふ物に云ふことなり是は通影云の
説と信ふ事なり

一 芝山重豊卿苑隨風

風はさふそよふなり橋苑神といふこと難いこと
此歌を抄に記すことなりと云ふことなり此歌
ありと地下に云ふことなり此歌橋苑より下に
うす此詞續し也やうけり中(請む)のふゆ
わづ玉といふなり

一 歌に玉木若木といふことありあ説をきくことなり
ことなり新しき切出ることなり若木といふ説は
若木ありと云皮は若木の皮なりと云玉木といふ
若木を若木といふもあ説をきくことなり伊勢丹
若木といふことなりせは若木の若木の若木の若
掌金の若木の若木の皮付てことなり次實事成を
用抄物といふの説のことなりと云ふことなり

禁中日月決り

え後をいふる本並来れずものうけは実業白葉染
この世の庭雪の禁庭の事も也別けはる本皮をさるる
そふ本風流しとまきせて振る垣あふく一依見
わもくくどじと物二つよりけいもさきかゆと

見後をい柳橋 ちと来
素性

見後をいも紅葉も 新葉
定家

夫がけう人の様さうけうと通影云のおほきとけう

一廣豊卿の此話まあるや一付通者まよけしとてけら
まうそ紅葉といふゆゑさゆりも雪はよそ紅葉事
まきとけ出と夫が春さうけうをまみしつてもゆもてさ
なうする也紅葉の全紅葉もそ又黄紅葉もそま
はるも紅葉もみ出とさうけうもさうけうもさうけう

と紅葉もさうけうもそ紅葉もさうけうもさうけうも
一紅葉のいふ紅葉とのおゆりもさうけうもさうけうも
さうけうもさうけうもさうけうもさうけうもさうけうも
ものまもさうけうもさうけうもさうけうもさうけうも
楓下 題いふ
みんさく

一馬蹄ていふいふさうけうもさうけうもさうけうも
此歌もさうけうもさうけうもさうけうもさうけうも
いふさうけうもさうけうもさうけうもさうけうも
すいふさうけう

後撰集秋下五則のうけうもさうけうもさうけうも 此さうけう
をいふさうけう

一歌書のあつたさうけうもさうけうもさうけうも
いふさうけうもさうけうもさうけうもさうけうも

乃障子荒海の障子はあらず也夫故後拾遺集夏
の初の詞書より得の障子に書付るゝとありといふ金ふ
すゝ事也是も廣豊卿の詠あり

後水尾院所詠の障子（金ふ銭金）といふもてきみゝ也
後拾遺集夏秋 皇子因親との給合もる金ふけし書付る 一平金障子
同封の言の旨 伴勢部有力といふ金ふけのまふ川原のまふ此といふみふ
推定夏秋後拾遺集所詠の障子といふ也金ふ銭金
さういふはのちのみ 相模一名竹尾入道一歳さる女房父源頼政

一六帖

を流おのゆるはつゝあらずとあらはれあゝそのいふも
此詩を 天子信膳の女官只と所膳とすみするは
手長の人ゝ来て所膳をすゝるはさうといふする
そめ障子はこゝに於てあるは也いのおものといふ毎日
乃信膳ありはる来といふといふもその故也と信膳の

女官に心づけする殿上人の極もゝ新也と信膳のさる
もさるもこれといふ此詞もいふは 依所膳なり
ふくれその様曲といふものゝて夫へくはくそゝ人い
糖ありと曲物なり大なるもの也是は信膳のいふも云
所膳の具と云くまゝは物なり信膳の来毎日所膳と
に新し此を用ひる殿上人のされはるる金盤所目
多るあるもの也後拾遺集は信膳の来とて水と云たり
つゝも金ふけもる此雲のといはるゝ新代巻下巻豊
玉娘のそんを引く川うかると也と抄物目みえとい
信里あり公卿の人 禁中ゝつゝて水と云たり
と新也といふものゝ 禁中れゝゝと云ゝてさうい
ちゝゝと云ゝ

新撰六帖は光俊朝臣勢也一平にせうとていふもよとあやう。
建曆中記云無出所之時侍於北障子鳴扇三音始靜後三早鳴也其時
陪膳之人令撤之
日本書紀神代卷下ニ有數人桃園出遂以 鏡來
當汝水云

永仁四年百首 貢物仲實朝臣 未三十二出

長慶の常陸乃とていふもよとあやう。
ふやと云歟大藏省のりゆとていふもよとあやう。
極いと云ふもの古歟を思ふとていふもよとあやう。
禁中乃のりゆとていふもよとあやう。
とていふもよとあやう。

一古と云歟案は三島の傳とていふもよとあやう。
又傳傳とていふもよとあやう。
決てあるゆゆとていふもよとあやう。
とていふもよとあやう。

傳續したるもよとあやう。
是と云ふゆゆとていふもよとあやう。
孝とていふもよとあやう。
上母位とていふもよとあやう。
三系西實隆とていふもよとあやう。
此使とていふもよとあやう。
傳ふ家祇の礼世のりゆとていふもよとあやう。
使とていふもよとあやう。
別とていふもよとあやう。
三系西實隆とていふもよとあやう。
武士傳とていふもよとあやう。
田とていふもよとあやう。

予願性院准大僧正兼男三任大納言夏永 十三年 平法雲院
が爲丸光廣身實成社人相下といふ人を誅て勅使し
二平丹後より来る勅を以軍地とせ古く傳へる
て其之藤原ハ 天子の師範とて藤原田(伝)りて
田も是ふ歌對し難い心をむく死退し夫れ此傳
禁中にありて時の和歌所と傳へる公卿(河)傳夫も
二公卿よりて入る縁ゆと立是(傳)る人も
前皇より當今(河)傳してある公卿より
當今(河)傳してある事也 中河門院の武者小路殿
より古くは和傳者(河)傳してある公卿より今
有栖川職仁親王ハ 其元院の皇子とて傳へます上
和歌の宗通とてある公卿より今(河)傳して
ある公卿より今(河)傳してある公卿より

乃大地の義と細川殿存る人も武士和(河)傳
傳へる人もやある今和傳と傳へる人も
殿存の具書あるは是貪欲家の擬作として思ふ
朝廷(對)し是もある(河)傳してある公卿より
三島十二歌の傳記立の傳記和歌の傳記名席と
名席八條の傳記とて今(河)傳してある公卿より
香卿の傳記とて(河)傳してある公卿より
て三島の傳記とて(河)傳してある公卿より
傳書ねむ持する人も書ねむ持する人も
さる人も(河)傳してある公卿より
も(河)傳してある公卿より
一閑寂有聲 春日為群 為美物師

東鑑不記
いふこと未

遠近の事なりともあやふい申すおぼつたすくもふ

ことい様の事なり

同
はあふ多し限あつて世中に誰よりともして

いほふみのこと也

貫之の歌

同
多しすくぬも一元の事もなしく誰よりともふ

常れふことなり

宮内卿の歌

同
来ふもねむきの開方よりともしてわつて聖域の玉

後成卿の歌

誰をともひはるはあつてもともとののみは歌をい

山鳥なり

後あこの歌

一松永貞徳初てはまづけ料の抄をうらへてあ

とち料せり貞徳のふと古と傳源氏物語の傳と云

事ハ決るいふす申せり好むい夫をける決るい

い事乃傳更とならぬ我のふする決る人よりてい

事いむいて後我をを傳よ三ヶれ傳五ヶれ極る

つとて決る事いふ事と見えたる事此後我料ハケ

乃傳は源氏と古とせものいむに書するもの也そ

をゆる人三ヶ五ヶれ傳をつまづり文面ふつて

考へ傳つる貞徳の本意いふに遠きり貞徳も皆

自來りて立ち終るものなりともハヶれ傳つて

ふ終すいむにさるく立ち終るものなりともい

傳は一筆も二筆もいむおろして仕えらる事なり

見ざるなりと貞徳の考しと今年う考へしと多し引合
を院款を四ノ本文をてし合を書記して古源忠
考を題しときたる人の考なりと考へしと多し引合
を院款も紀院もあまた又考へしと多し引合
を院款も紀院もあまた又考へしと多し引合

一 元來款をともみ人志をばしとの時方東道家
入門ありふ入門の款ありと考へしと多し引合
解院案より中院案入門ありと考へしと多し引合
を院款も紀院もあまた又考へしと多し引合

一 和款の案より人志をばしとの時方東道家
入門ありふ入門の款ありと考へしと多し引合
解院案より中院案入門ありと考へしと多し引合

當今法門神佛の款勅勅の人の考論あり款
實より名れしと考へしと多し引合
款も紀院もあまた又考へしと多し引合

一 源重之家の案

白岐の立田の川を出しはほやと考へしと多し引合
此立田の川は山城の立田の川也取原古今概抄は山城河
を立田川と記しはほやと考へしと多し引合
實陰卿の位より考へしと多し引合

頭取を概抄に合しは注也定家概抄は源重之家の案あり今の款注も是を注
なり右の考の注なり

一 定家卿式子因親王を數らせらば中絶する事
小なりと云ふもみづから送る事あり

[illegible]

切ふらむと云ひて漢文にて要哉乎也乃助語と云ふ
漢文乃かきあらは是の一字遠ひてもよくあす又
漢文をさうふゆへに必ず助語なく直傳せよ助
語有るの助語のふらむ合点するてふ人の傳を
自然とすじ也人志事とておもしろいものなり
うらなふ入るぬ所は助字直する教あり入るぬ
所は教あるなしとて思ふなりとてゆえする
やうにのみは讀む教ありやうくたす教もおも
たす一はふらむとてふらむとて一は説の意や
一は説あるは趣好の事一は料は外來あるは海一は
是れおもふといふと云ふと云ふ又有一は然のふらむといふ
是れ北也是も直傳てふと云ふ教のふらむといふは氏卷の

力張る衆

一 前にもいふごとく和歌のてまはめておたぬものといふや
也はといふ漢文の助語は秋といふもの而しては
も當面の字中へいれゝて上の事に下のことをいふ
かといふもそれかきあはせむといふかきあはせむのす
而時習と読めてあつて物も一方諸の遠くを
の字は章は終りに直といふ日本にといふ思ふところ
いふ語は物もはといふ下に直といふものをあはせ
いふ物もはといふと而といふ物もといふ物もといふ物
漢文とて書けし物もはといふははははといふ物も
み我衣といふ物もはといふ物もはといふ物もは
といふ物もはといふ物もはといふ物もはといふ物もは

らを歎つて独ぬふとよもし也是を日本書紀にカキテ摠
 而哭ナク日本書紀に云く門と云たる是なり也神代
 卷天地の章に云く我に云い而云云字跡年
 狩りふてきふへし我ももつに十一種の川と
 云事有是いてめい傳りても別してありとする言
 あり実種傳の傳りし類或人等と概して傳るはよ
 一あり鹿川もろきう類もあつて我をあらう
 けろつて類ありしりとも云詞なるなり心と
 通す法もふち此はてきこつてみあつ
 かなにもあり包むは右十一種あり

一 堀川院百首

題野作志肥後

我をさる物なれと云何のふうつる也料るもつ
 是をさるういといふ武省小路實陰門人元と小段
 あり我を平野社詣ありいとて紙屋川より来
 ずも竹の橋を下駄して渡りせ我をこの海をくら我
 ども門人元是のふといふなり有村實陰卿
 世に渡るるもいふあやういふつに我の竹の海
 見えありと我のふとて日と伝ふなりと門の狩也
 一新後拾遺 春井下 花開自通書
 風をさるもの橋なれといふぬ我も言といふつ
 此のふきとて類ありしり也依てよけりありに
 あ架つてきふぬやもつにまはりの字のふとて橋の
 あまもつてきふぬやもつにまはりの字のふとて橋の

うきつとく(すふもの也是は)秘あつはいつく様る
まてのちとどむゆか来

續後撰集 後醍醐院御製

海のともも開路の板をさしつね月をばりもつ
是のちと朝のうへ秘あつとつ秘理やあそつて
よはの子ゆきもあつてさつりて此歌のみを秘あ
つとつあつたあつてさつりてあつてさつりて
あつてさつりてあつてさつりてあつてさつりて
あつてさつりてあつてさつりてあつてさつりて

續古今集 橋の弁とて 藤原義春

春風のそけり秘あつ橋の弁もあつはあつ
とつたをさつりてさつりてさつりてさつりて

とつたをさつりてさつりてさつりてさつりて
秘あつ橋の弁もあつはあつはあつはあつ

秘あつ橋の弁もあつはあつはあつはあつ
秘あつ橋の弁もあつはあつはあつはあつ

一 伏見院御製

秘あつ橋の弁もあつはあつはあつはあつ

秘あつ橋の弁もあつはあつはあつはあつ
秘あつ橋の弁もあつはあつはあつはあつ

一 後子載集

秘あつ橋の弁もあつはあつはあつはあつ
秘あつ橋の弁もあつはあつはあつはあつ

後撰の歌にて別まつと有るものも歌と歌する詞へ
定家卿百一首(當時の風は改くわもて)引出
る入る歌その川にてとつて平家卿也定家卿の
ふも歌のつ辞全歌するふあもいふものもいふ川に
よていふこれ辞古風とく當せふいふものもいふ引出
續古今年末 義のころ月 権中絶言と雄
かきあめの下ふ草の移り移りといふことね神のまじ
是をあめいふ川にいふ人いふことね神のまじ
ころりたるも

太十一種の内と辨(も)てつての歌をよみ(も)て
多ふふるもいふことね歌のまじあはれやうとて歌
あ(も)る多(も)とておぼ極秘して傳へ(も)てねん

一 漢路嶋難波をけくえ波をい波のころり草子成
この草子三葉もつて寄海難

後撰集離別の新みくらけくはゆつけふ人よ藤てふ
一 寄歌終り

別まつたるの重あまなりいふはあふもそ(も)はれ
草子書(も)ふも歌終(も)つてもあ(も)て也夫源氏物
語梅の枝のまじあ(も)て草子(も)たふもそ(も)中院
大細言通方卿家来傍抄小地平終極極家練草子
と何れもそ(も)いふ歌(も)まじ月(も)後(も)よてあ(も)川(も)いふこと
な(も)いふも(も)あ(も)め(も)り(も)それ(も)あ(も)て(も)あ(も)う(も)て(も)
是(も)を(も)草子(も)書(も)も(も)歌終(も)も(も)て(も)也實陰卿(も)月(も)あ(も)
記(も)の(も)書(も)色(も)の(も)終(も)る(も)あ(も)も(も)ふ(も)す(も)人(も)と(も)あ(も)る(も)也實也

和歌のてしものしきも又中紙集上下二巻なり
月記和歌の部類と稱し此月文書の寸法も
之より粗して和歌の寸法に劣るは物多紙懷
紙種冊大種冊大各紙大懷紙種草の紙の種官位
種冊をのち小柳宮和歌の直書の柳をのち種冊
二巻の寸法物あり是ハ別は種冊にて寸法の差なり

明月記元久元年十二月十六日著下種冊已時冬殿年時所共春所所未別
出所各處石冬入置所大依所種冊の例あり種冊の種冊の寸法も
之より粗して和歌の寸法に劣るは物多紙懷紙種冊大種冊大各紙大懷紙種草の紙の種官位
種冊をのち小柳宮和歌の直書の柳をのち種冊二巻の寸法物あり是ハ別は種冊にて寸法の差なり

花山院宣紙公曰此と照高院所傳の書物の中より
鳥丸光宗公白種冊不破の關板の寸法は始より一説不用之別一官家の秘
説あり

一 定家卿の明月記百巻より余より物也此世より一説あり
一也世より物なり五十五巻或は七十五巻を言ふ一説あり
色冊をのち綴する物なり種冊の成り一本書の
冷泉家より傳ふ物なり冷泉家より全巻あり一説あり
倭の種冊も是なり此冊を余より種冊と稱して定家卿より
下と稱し一説あり定家卿の記録の切として種冊の
屏風より種冊の明月記の半紙の世より種冊あり
其元院は皇女所文庫より種冊あり此冊八巻なり是世
より明月記補と稱し種冊より種冊の寸法は種冊の
に劣るなり一説あり種冊の寸法は種冊の寸法に劣るなり

表よりものなる山莊は師より母方より伯父表通
坊といふ人ともて庵室御よりいふとて子より各
紙形二百枚より定家卿にあらはれ何よりてもあら
付て給ふことおぼしきほどに出されに家隆より
順徳院よりいふて百首書付て急なる事よりて撰ふ
事よりてなく書うといふたう建暦年中のこと也
明月記をたうふ此亦百人そのことみえ次彼二巻を
和歌歌歌あり大鏡云中関白殿東三條院より
そよりて此子よりて給ふことおぼしき紙形
を此大式修書給ふこといふ例もあらはれを
しや光香卿百人一首の妙玄旨法原の抄と始ふ
の表よりて理なりそよりてその時 朝廷よりて撰ふ

和歌の集苑のみるて實すこと此をうもてして
花實に和歌の歌百首撰撰ひ自に山莊よりてを
いふ紙形とあらはれりて明月記よりて此の巻
冷泉家よりて 具元院の代よりていふに
そよりていふこと此世よりて此説を書給ふこと
定家卿薨はるる紙をそよりて巻既り 天智天皇
を直書しそよりて物と見えたりと此の契件も
細をあらはれり百人その名のなることいふに
家のふあつてもとて此歌の決よりて直たること
のりゆかりとて添削して改觀抄されしこと
あり此のことも 具元院の代よりて説の廣す
るは此説あらはれりといふこといふは

一 志願山師香卿の法より

志願山師の法は御法師より傳へ給ふ 慶應義塾と傳へ給ふ事あり
自頃云文安五年六月東通のとき家位十八日お小野舎社私宅の金銀七月日
あり二時の白也志願山師自筆を物よりしるす

一 子百書款合

新古今集并上巻系有款合

朝日やゆ白くふり橋をばさるゝとておまへをさるゝ
故河よりふり橋の中にも此款をばさるゝとて
とてさるゝとて此款をばさるゝとて
より東野別開書よりとてさるゝ
一 経冊といふと故河より物也とて説ありとてさるゝ
位除目の時経冊よりとてさるゝ紙をばさるゝとて
官位をばさるゝとて書付也とて牽開白也(経冊申文の由
くあまもさるゝとて款をばさるゝとてさるゝ

一 清サ網言此記よりとてさるゝ経冊のふり叙位除目の由
てとてさるゝとて

国史より他経籍或経集
清サ網を日記の考へ事抄より或男家法様よりとてさるゝ
をさるゝとてさるゝとてさるゝとてさるゝとてさるゝとて
さるゝとてさるゝとてさるゝとてさるゝとてさるゝとて

一 和歌墨能の事とてさるゝとてさるゝとてさるゝとて
撰りてさるゝとてさるゝとてさるゝとてさるゝとて
よて物のふり熟字よりとてさるゝとてさるゝとて
後水尾院秘して傳へるゝとてさるゝとてさるゝとて
とてさるゝとてさるゝとてさるゝとてさるゝとて
一 呉竹といふ物とてさるゝとてさるゝとてさるゝとて
とてさるゝとてさるゝとてさるゝとてさるゝとて

つを待つ。卯糸の如紙にうつつ巻きて他志を以て
おとしも清サ細言の枕草子にもまじりし卯糸
殿うつりしれども鶴子殿しやうれ物あはけ殿う
はりしと云いし乞食の魂も追せしすめまはるのま
風也河童開白飯新飯を造らるをねをねをねをねを
いふものち衆

枕草子物語のうへすみよりうつかりの秋殿はる月とあるに
卯糸りとの如紙よりを廣平元年よりうつり也とあり

慶安四年四月廿日

一 將軍家元公河他界の時 後水尾院仙洞より

わきもききい

あはれははるお月の廿二にききいしうふあはれ
後水尾院の秋は後しとせあはれしうふあはれ

ききいしうふあはれ 天子ははるしうふあはれ

山師香殿の法あり

一 賀の秋を詠するといふあはれしうふあはれ

わきもききいしうふあはれしうふあはれ

そは實はあはれしうふあはれしうふあはれ

秋を詠するといふあはれしうふあはれ

秋を詠するといふあはれしうふあはれ

秋を詠するといふあはれしうふあはれ

秋を詠するといふあはれしうふあはれ

秋を詠するといふあはれしうふあはれ

秋を詠するといふあはれしうふあはれ

秋を詠するといふあはれしうふあはれ

まゐりても知んてその款の一評して手不致業と云
味を人の識むてふくは傳の事 和款のよみ。
ふの云おほくは傳と云ふはくしてても他例とてふを
はめてふゆふくは傳と云ふはくしてても他例とてふを
よつて批判をうける也批る者の善惡をゆるす
めを判のま業を味もくも也此傳の十八ヶ條を傳
の智こつてもあつてふはせの也此をゆるすは只
つきのむきにはくつてふはくしてても他例とてふを
ことゝも此傳のむきにはくつてふはくしてても他例とてふを
ゆるす十八ヶ條の列に傳す

此一帖の極秀樹子の筆記也極子の京師の某卿は
仕へく常に衣冠の徳を公け曉述して和款の秘
説を取て記憶し新着也云々ありて末末のむき
直接むきを評述道志ありて感ありし書寫と
稱すゆひゆひは書寫するは我子孫和款の
志ありむきの志永く是れ實とせよ

甲申
夏六月十二日 源昌世

極秀樹子園兵記云々ありて也並に重豊卿も仕へて金元末極
列多田の所家入多田兵記と云ふ

極列多田の社の所家入多田兵記と云ふは
本社附も成るもの也亦これ社の秘直の事なり社

既乃事に急めしむねを戒めし子也也奉公
もも出寄るおきねりてあるおほい笑る侍
八幡侍なりと云ふ歌あり

安永二年 癸巳八月既望の日に下尚志子
ありて書馬之 有朋

天明元 年七十二月上浣馬 公勢繁多偶難得
暇日困室之逗海紛と不遑宵と於牕下走虎筆
畢退而可清書者也

源詮實

天明元 年七十二月上浣馬 公勢繁多偶難得
暇日困室之逗海紛と不遑宵と於牕下走虎筆
畢退而可清書者也

九州大學圖書印

